SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

自動詞の他動詞的構文についての意味論的アプローチ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 澤野, 亜美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010289

自動詞の他動詞的構文についての意味論的アプローチ

On Semantic Approaches of Transitive Constructions of Intransitive Verbs

澤　野　亜　美
Ami SAWANO

（平成 28 年 10 月 3 日受理）

Abstract

There are some constructions whose intransitive verbs behave like transitive verbs in English. In this paper, we overview some previous studies which analyze intransitive resultative constructions and cognate object constructions by using Semantic approaches and consider their idiosyncratic behavior. Based on Goldberg (1995), Iwata (2006) provides the constructional approach for intransitive resultatives and studies the semantic role which are assigned from verbs and constructions itself. Sailer (2010) classifies cognate object constructions as four types of reading, by using a semantic approach based on Lexical Resources Semantics. In light of the problems of these previous studies, it remains an analysis on semantic approaches of appositive cognate object constructions for future research.

１．はじめに

英語には、(1)、(2) のように、本来は目的語をとらないはずの自動詞が、後続する目的語や構文全体の特性によって、他動詞的にふるまうことができる動詞がある。

(1) 自動詞結果構文
　a. The river froze solid.
　b. He tied his shoelaces tight.　(Iwata (2006:450)
(2) 同族目的語構文
　a. The baby slept a sound sleep.　(Nakajima (2006: 677))
　b. Harry lived an uneventful life.　(Jones (1988: 89))

本稿では、自動詞結果構文と同族目的語構文を意味論的アプローチで捉える分析を概観し、自動詞構文の特異性について考察する。

２．結果構文の構文的アプローチ

Iwata (2006) は、Goldberg (1995) の “Constructional approach（以下、構文的アプローチ）”

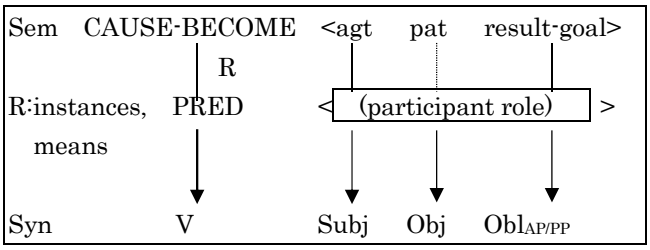
グローバル企画推進室

を利用して、自動詞結果構文を分析し、Goldbergの構文的アプローチでは捉えられない、タイプの異なる自動詞結果構文が存在すると主張する。Iwataの分析を見る前に、Goldbergの構文的アプローチについて概観する。

2.1. 他動詞結果構文の分析

構文的アプローチとは、Goldberg（1995）によって提唱されたアプローチで、「構文は、形式と意味が結びついた結合体で、構文自身も項をもつ項構造である」と定義される。つまり、動詞の語彙的意味とは別に、構文自体にも意味を与えるという考え方のことである。このアプローチで他動詞結果構文の構造をあらわすと、図1のように示される。

図１．他動詞結果構文の構造



・Sem：項構造/Syn：統語構造
・R（elation）：動詞と構文の関係
・PRED（icate）：動詞
・Obl（ique）：斜格

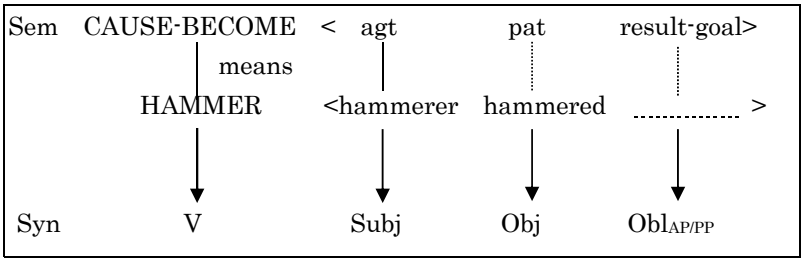
（Iwata（2006: 451）

Semは構文の項構造をあらわし、Synは構文の統語構造をあらわしており、図１から３つのことが読み取れる。１つ目は、この構文は、agent、patient、result-goalという３つの項から成ること。２つ目は、この構文は、“X causes Y to become Z by V-ing.”という意味を持つこと。そして、３つ目は、この構文の意味が、統語上の表示では、Subj、V、Obj、Oblというようにあらわされることである。さらに、図１のOblはoblique（斜格）を指し、PREDには実際の英文における動詞が挿入される。CAUSE-BECOMEからPREDへ伸びるダッシュの横のRは、動詞が構文に対して持っている関係をあらわす[1]。最後に、動詞の意味的性質は、ある状況に明らかに関与しているモノを指す、patient role（参与者役割）によって記述される。

図１の構造をもとに、実際の他動詞結果構文を分析すると、(3) の構造は図２のようにあらわすことができる。

(3) a. He hammered the metal flat.
b. He hammered the metal. （ibid.）

図２．



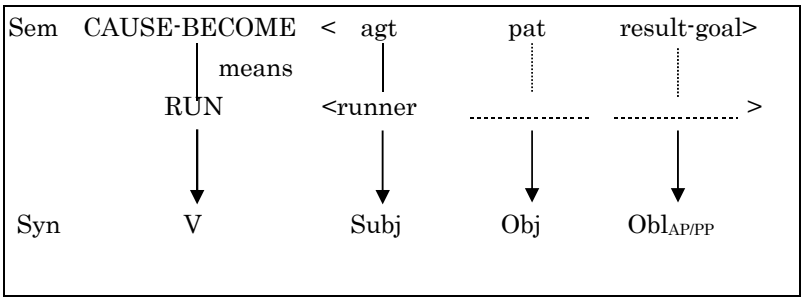
（ibid.: 452）

図２で示されるように、構文が含意する３つの項役割は、agent、patient、result-goalであり、動詞hammerが含意する２つの参与者役割は、hammerer（打つモノ）とhammered（打たれるモノ）であることがわかる。また、(3) の動詞hammerは、直接目的語をとる動詞なので、(3b) のように、結果句flatと独立して単純他動詞として現れることができる。したがって、構文が含意する項のagentとpatientは、動詞が含意する参与者役割hammererとhammeredとそれぞれ融合するが、構文が含意している3つ目の項役割＜result-goal＞は動詞hammerと融合することはない。したがって、単純他動詞結果構文の結果句（3a）のthe flatは、動詞からではなく、構文によって項役割が与えられているということがわかる。

結果構文の注目すべき側面のひとつに、普通は直接目的語をとらない動詞も構文内に現れることができるという事実がある。(3b) と（4b）の文法性の違いからも明らかなように、(4) のrunは直接目的語を単独でとることができず、このような動詞は一般的な目的語が省略して使われる、自動詞用法の他動詞と理解できる[2]。このような他動詞結果構文は図３のようにあらわされる。

(4) a. The joggers ran the pavement thin.
　　b. *The joggers ran the pavement.　　(ibid.: 451)

図３.



(ibid.: 452)

図３で示されるように、(4) では、構文から付与される項役割はagent、patient、result-goalの３つで、動詞runから付与される参与者役割は、runner（走るモノ）であり、図２の例と同様に、結果構文の結果句をあらわす項役割である、result-goalは構文によって付与されていることがわかる。

以上の分析を踏まえると、英語の他動詞結果構文は（5）の２つの特徴を持つことがわかる。

(5) 英語の他動詞結果構文がもつ２つの特徴
　　a. 構文は意味的に“X causes Y to become Z by V-ing”を持つ。
　　b. 結果句によって示される状態の変化は、動詞に含意されず、構文と関わる。

2.2. 自動詞結果構文の分析

さて、前節の他動詞結果構文の分析を踏まえ、自動詞結果構文の構文的アプローチを見ていこう。Iwata（2006）は、自動詞結果構文も本質的には他動詞結果構文と同様に分析するというGoldbergの提案に従うと、(6) の自動詞結果構文の構造は図4のように分析される。

(6) The kettle boiled dry. (ibid.: 453)

図4.

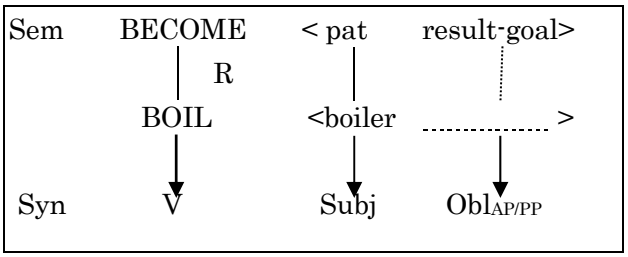


図４からわかるように、構文が含意する項役割はpatientとresult-goalであり、動詞boilからboiler（沸騰するモノ）という参与者役割が付与されている。また、結果句result-goalは、動詞の参与者役割に融合しない。このことから、自動詞結果構文も（7）でまとめる、２つの特徴を持つと言える。

(7) 英語の自動詞結果構文がもつ２つの特徴

a. 構文は意味的に“X becomes Y by V-ing”を持つ。

b. 結果句によって示される状態の変化は、動詞に含意されず、構文と関わる。

しかしながら、自動詞結果構文には、このGoldbergの構文的アプローチでは説明できない（8）のような例がある。

(8) a. The river froze solid.

b. The river became solid by freezing. (ibid.)

(9) a. Casey waltzed out of the room.

b. Casey went out of the room by waltzing.

(Levin and Rappaport Hovav (1999: 206))

Levin and Rappaport Hovav（1999）は、(9a）は（9b）の適当なパラフレーズであるのに対し、(8a）は（8b）の適当なパラフレーズではないと主張している。彼らの分析によると、１つの文が２つの出来事をあらわしていると考えられる（9a）のような例であれば、(9b）のようにパラフレーズできるが、(8a）のように１つの出来事のみで文が成り立っていると考えられる構造は、(8b）のような言い換えがあまり好まれないということになる。つまり、(9a）は①ワルツを踊ることと、②部屋の外に出ることという２つのイベントが起こっているが、(8a）は、凍ることと、固まるという出来事は、１つの出来事として解釈されるということだ。したがって、(8a）の自動詞結果構文は、(7a）で示した、構文が意味的に“X becomes Y by V-ing（ある出来事によってまた別のある出来事になる)”を持つという、自動詞結果構文の1つ目の特徴を満たしていないことになる。

さらに、(10）のCOBUILD（1995）の辞書におけるfrozeの定義を踏まえると、(8a）は２つ目の特徴も満たさないとIwataは主張する。

（10）もし液体や液体を含む物質が凍るとしたら、それは、その低い温度が原因で固まる。

（10）によると、（8a）の動詞freezeは固体であるという状態をも含意しているため、結果句の状態の変化は動詞に含意されないという2つ目の特徴を満たしていないことが導かれる。

以上の対比から、自動詞結果構文は、（6）のようなGoldbergが仮定する構文的アプローチによって適切に扱われることができるものと、（8）のように別の分析が必要となる構文の２種類に分類されることがわかる。Iwataによると、後者のような自動詞結果構文にはさらなる特徴を持つことがわかる。

（11）a. The front door was painted a shiny black, and the brass knocker gleamed spotlessly.
b. I dyed my hair red.
c. Melting coastal snow supports an ephemeral algal flora that stains it red or green.
（Iwata（2006: 454））

（11a）の動詞paintは色の変化を含意するため、結果句a shiny blackは動詞のもつ意味とまったく孤立した状態というわけではない。むしろ、すでに動詞paintが含んでいる意味の概念colorを詳しく述べていると言える。同様に、（11b）のdyeや（11c）のstainも動詞が何かの色を変えるという意味をもつので、結果句redとred or greenは、動詞の含意する意味の概念をさらに詳しく述べていることになる。したがって、このタイプの自動詞結果構文は、「動詞によってすでに含意されている状態の変化を詳しく述べる」という特徴を持つことがわかる。

では、Goldbergの構文的アプローチでは分析できない（8）、（9）、（11）のような自動詞結果構文はどのように分析すればよいのだろうか。Iwataによると、これらの自動詞結果構文の結果句は、付加詞として捉えることができると考えられる。付加詞としての結果句が動詞の含意する状態変化を詳述すると考えれば、動詞があらわす主要な出来事と結果句のあらわす状態変化は、まったく同じ出来事の中の異なる側面をあらわすと言える。つまり、動詞と結果句はまったく異なる出来事をあらわしているわけではないのであり、“X becomes Y by V-ing”、あるいは、“X causes Y to become Z by V-ing”のどちらかによってパラフレーズすることはあまり好ましいことではないという事実に正しい説明を与えることができる。

2.3. 付加詞説の一般性

Iwataによると、前節で述べた付加詞分析は、同じく付加詞に分類される副詞に関する分析と、経路句に関する分析を考察することで、一般性を持たせることができる。
Cruse（1986）は（12）の例を示し、副詞の付加詞分析を説明している。

（12）a. Arthur rushed quickly to the door.
b. Arthur ambled slowly across the lawn.
c. Arthur murmured softly in Bertha’s ear.　（Cruse（1986: 108））

（12a-c）の副詞quickly, slowly, softlyは、（12a-c）のそれぞれの動詞rush, amble, murmurがもつ意味に含意されている。そのため、（13）の例で示されるように、それぞれの副詞が反意語によって置き換えられる場合、もともとの動詞の意味とは異なる副詞が挿入されることになるため、容認性に影響を与えることとなる。

（13）a. ?Arthur rushed slowly to the door.
b. ?Arthur ambled quickly across the lawn.
c. ?Arthur murmured loudly in Bertha's ear. （ibid.）

続いて、付加詞として分析される経路句の例を示す。

（14）a. Bill entered/left/exited（the room）through the bathroom window.
b. Bill crossed（the street）to our side.
c. The cream rose to the top. （Goldberg and Jackendoff（2004: 557））

（14a-c）の動詞も、（12）の例と同様に、動詞自体が経路を具体化する意味をもっている。（14a）のenterは“to go into”、（14b）のcrossは“to go across”、そして（14c）のriseは“to go upward”という意味動詞自体がもつため、経路句は、動詞の持つ意味の概念をさらに詳しく述べているということが示される。

以上の事実から、付加詞である副詞と経路句が顕在的にあらわれることができる理由は、その副詞の概念が動詞がもとから含意している意味の概念をさらに詳しく述べているからであると論じられ、Iwataの自動詞結果構文の結果句を付加詞として扱う分析に一般性を持たせることができる。

さて、経路表現の生起に関する制約を用いると、付加詞説で分析する自動詞結果構文のさらなる特徴を説明することができるとIwataは主張する。Goldberg（1991）は、空間的な方向をあらわす経路表現と状態変化をあらわす経路表現は、同時に一つの文に現れることができないと主張している。

（15）*The vegetables went from crunchy into the soup. （Goldberg（1991: 369））

（15）の例からわかるように、into the soupという空間的な方向をあらわす経路表現と、from crunchyという状態変化をあらわす経路表現が共起する文は非文法的であると判断される。Goldbergは、移動物は隠喩的な経路と文字通りの意味をあらわす経路を同時に越えて移動することはできないためであると説明し、（15）の移動物the vegetablesは、隠喩的な経路のfrom crunchyと、文字通りの意味をあらわす経路into the soupを同時に越えて移動できないために、（15）の文法性に影響が現れたと主張している。

これは、（16）のように、移動物が隠喩的な経路のみを越える場合は容認可能な文となることからも正しく説明される。

（16）The story brought him to tears. （ibid.: 372）

この事実に基づき、Goldberg（1991）はThe Unique Path Constraint（以降、UP制約）という経路表現に対する制約を提案し、モノの移動とその経路表現に関する意味的な制限として（17）のように定義した。

（17）UP制約
ある項Xがひとつの物体を指しているとき，Xに対して単一節内で，複数の異なる経路の叙述を行うことはできない。（ibid.: 368）

興味深いことに、付加詞説をとる自動詞結果構文は（17）のUP制約に従わないという事実がある。

（18）a. He spread the butter thin/trick.
b. He spread the butter on the bread.
c. He spread the butter thin/thick on the bread.（Iwata（2006: 463））

（18a）の結果句thin/trickは、UP制約に従えば、（18b）の空間的な経路句on the boardと同時に１つの文に現れることはできないはずである。しかし実際は、（18c）のように結果句と経路句が同時に現れても文法性に問題はない。この事実は、一見すると、自動詞結果構文の付加詞分析の判例になるように思われるが、空間的な経路と隠喩的な経路は両者とも構文の項であり、両者は並行的な構造を持つと言える。したがって、結果句を付加詞であると考える（18）のような結果構文の場合、構文の項である経路句と、付加詞である結果句は、同じ位置にあらわれても競うことはないので、UP制約に従わず、（18c）のような容認可能な文となるのだと説明される[3]。

３．同族目的語構文の意味論的アプローチ

3.1. 同族目的語構文の特異性

英語には、動詞の後ろの目的語の位置に、（19a）で示されるように、動詞と同じ形をした名詞や、（19b）で示されるように、動詞と形態的に関係している名詞が後続する構文があり、このような構文は同族目的語構文と呼ばれ、動詞に後続する名詞は同族目的語と呼ばれる。

（19）＝（1）a. The baby slept a sound sleep.
b. Harry lived an uneventful life.

先行研究における主な論点は、同族目的語の位置づけである。つまり、同族目的語が、動詞の項（argument）であるのか、付加詞（adjunct）であるのかということであり、大きく３つの分析に分類できる。（20）でまとめる。

（20）a. 同族目的語を項として分析：Jones（1988）, Moltmann（1989）
b. 同族目的語を付加詞として分析：Massam（1990）, Macfarland（1995）
c. 同族目的語は項と付加詞の両方の場合があるとする分析：

Matsumoto（1996）, Nakajima（2006）

それぞれの分析方法の詳述は本稿で扱う範囲を超えるため割愛するが、これら分析は、同族目的語構文を統語的に観察する研究が多い。

本節では、英語の同族目的語構文を意味論的観点から４つのタイプに分類するSailer（2010）の分析を概観し、同族目的語の振るまいの差異は、タイプの異なる“family”として捉えることで説明できるという提案について見ていく。

3.2. 同族目的語の意味論的分類

同族目的語を意味論的観点から分析した先行研究は、大きくわけて２つのアプローチが採用されている。1つは、Moltmann（1989）が提唱する、event readingで解釈する方法で、もう１つは、Macfarland（1995）やKuno and Takami（2004）らが提唱する、effected object readingとして解釈する方法である。Sailer（2010）は、上記の大きな分類に加えて、同族目的語の語彙特性に基づき、concrete / particularという具体性のあるものと、generic / abstractという総称的なものもあると分析し、４種類のタイプにわけられると主張している[4]。本節では、４種類の例文の特徴について見ていく。

タイプＡは、同族目的語がevent読みで解釈され、かつ、particularな性質を持つと解釈される構文で、（21）にその例を挙げる。

（21）Particular Event readingで解釈可能な例

a. Alex lived a happy life. （Sailer（2010: 196））

b. Alex lived happily.

（21）のような構文は、第一に、動詞とその目的語名詞句が同じeventを指すという特徴をもつ。Jones（1988）、Moltmann（1989）らによると、動詞とその同族目的語名詞句が同じeventをあらわす場合、その文はevent readingの読みが可能だと言う。（21）を見ると、動詞liveとその同族目的語a happy lifeが意味するeventは意味的に同じであると考えられ、この文はevent readingによる解釈が可能となる。

第二に、Moltmanによると、同族目的語構文の主語とその目的語が意味的に叙述関係にあるとき、その目的語は主語に特定されていると考えられる。（21）では、主語Alexがその目的語名詞句a happy lifeの動作主であることは明らかであることから、a happy lifeはparticularな性質を持つ。第三に、この読みにおける同族目的語は典型的に、不定冠詞―形容詞―名詞という形を持ち、修飾語が現れることから、（21b）のように様態副詞による言い換えが可能となるという特徴をもつ。

タイプＢは、同族目的語がeffected object読みで解釈され、かつ、concreteな性質を持つと解釈される構文で、（22）にその例を挙げる。

（22）Concrete Effected Object readingで解釈可能な例

Bailey sighed a sigh that said many things. （ibid.）

（22）のような同族目的語構文は、第一に、同族目的語が動詞があらわす行為の結果をあらわしているため、動詞に影響を受けるという特徴を持つ。（22）の目的語a sighは、動詞sighの溜息をつくという行為の結果を意味するため、a sighは、動詞の影響を受けると考えられ、このような解釈をeffected object readingと呼ぶ。

第二に、このタイプの同族目的語はconcreteな性質を持つ。a sighは、「息を吐き出す音」という具体的に特定できるものを指すと考えられるため、当該の目的語は具体的な特定性をもち、concreteな性質があると考えられる。このとき、Sailerによると、particularとconcreteの性質は同じものとして捉えているため、（21a）の例と同様に、主語と目的語の叙述関係からconcreteの性質を説明できると主張される。つまり、（22）を見ると、主語Baileyが目的語a sigh…の動作主であることは明らかであるため、同族目的語はconcreteな性質を持つ。第三に、このタイプの同族目的語は代名詞によって指示されうる。（22）には一見すると、代名詞がないように見えるが、that がand itと言い換え可能であることから、a sighが代名詞itによる指示を受けているとわかる。

タイプCは、同族目的語がevent読みで解釈され、かつ、より抽象的・総称的なgenericな性質をもつと解釈される構文で、（23）にその例を挙げる。

（23）Generic Event readingで解釈可能な例

a. For two long years I lived the life of a slave.

b. For two long years I lived the kind of life of a slave. （ibid.: 200）

（23a）の同族目的語the lifeは、（21a）の例と同様に、動詞liveがあらわすeventと同じeventを意味していると考えられるため、event readingでの解釈が可能だと言える。さらに、より具体性のあるconcreteな性質をもつ例とは異なり、このような読みの同族目的語は、（23b）のように「ある種の」という抽象度をあげたkind readingでの言い換えが可能であるため、より総称的なgenericな性質をもつことがわかる。

最後に、タイプDは、同族目的語がeffected object読みで解釈され、かつ、abstractな性質をもつと解釈される構文で、（24）にその例を挙げる。

（24）Abstract Effected Object readingで解釈可能な例

a. Devin smiled the smile of reassurance. （ibid.: 196）

b. Devin smiled the（kind of）smile of reassurance. （ibid.: 201）

（24a）の同族目的語the smile of reassuranceは、動詞smileの笑うという行為を受けた結果を意味しているため、動詞の影響を受ける目的語であり、effected object readingで解釈可能である。また、（23b）と同様に、（24b）のようにkind readingでの言い換えが可能となる。したがって、同族目的語には抽象性があると考えられ、the smile of reassuranceはabstractな性質を持つ。さらに、この読みの場合、（25a）のように、同族目的語は定性をもち、抽象的な名詞を伴う前置詞句が後続でき、（25b）で示すように、所有格の限定詞とさらなる修飾語を含む同族目的語が共起することがある。

(25) a. …she smiled the smile of reassurance and of calm.
b. Sachs smiled his irresistible smile. (ibid.)

3.3. 同族目的語構文の意味論的アプローチ

前節で述べたようなタイプの異なる同族目的語を、Sailer（2010）は新たな枠組みを用いることにより、４種類のタイプは存在するものの、同族目的語構文のfamilyとして捉えることができると提案している。

Sailerは、Richter and Sailer（2004）が提唱するLexical Resource Semantics（以降、LRS）という枠組みを採用する。この枠組みは、構文の構造は語彙規則に基づいて決定されるとするもので、LRSに基づく同族目的語構文の構造を図5のように規定している。なお、便宜上簡略化した図を用いる。

図５．LRSに基づく同族目的語構文の構造

$$[\text{LOC}\ [\text{CONT}\ \begin{bmatrix}\text{HEAD verb}\\ \text{INDEX}\ \underline{e}\end{bmatrix}]] \rightarrow [\text{ST-ARG}\ <\text{NP}\ [\text{LOC}\ [\text{CONT}\ \begin{bmatrix}\text{HEAD noun}\\ \text{INDEX}\ \underline{e}\end{bmatrix}$$

図５において、矢印の左側が動詞、右側は同族目的語の構造を表している。使用されている関数について説明する。LOC（LOCAL）は、「動詞と目的語が、統語的ではなく意味的に局所的関係にある」ということを表し、CONT（CONTENT）は、語彙の意味内容を表す。また、INDEXは、eventに対する指標で、同じ指標を持つ場合は、動詞とその目的語が同一のeventを指すものと考えられる。ST-ARGとは、Syntactic Argumentのことで、統語的に、「目的語が動詞の項である」ことをあらわしている。したがって、図５によると、矢印の左側の動詞は目的語と意味的に局所的関係にあり、その意味内容は、主要部の動詞があらわす。INDEXは、ここではeventのeを持つと仮定される。矢印の右側の目的語は、統語的に動詞の項位置にあり、動詞と意味的に局所的関係にある名詞句となり、その意味内容は、主要部の名詞があらわしていることがわかる。この構造をもとに、同族目的語構文の４つのタイプを意味論的に分析していく。

まず、タイプＡのparticular event readingで解釈可能な同族目的語構文は、(26) の特徴を持ち、図６のようにモデル化される。

(26) Particular Event readingの特徴
a. 動詞とその目的語名詞句は、同一のeventを示す = event reading
b. 同族目的語とその主語は、意味的に叙述関係にある = particular reading
c. 同族目的語は様態副詞での言い換えが可能である

図６．

$$[\text{LOC}\ [\text{CONT}\ \begin{bmatrix}\text{HEAD verb}\\ \text{INDEX}_i\end{bmatrix}]] \rightarrow [\text{ST-ARG}\ <\text{NP}\ [\text{LOC}\ [\text{CONT}\ \begin{bmatrix}\text{HEAD}\ [\text{DEF}\ -]\\ \text{INDEX}_i\end{bmatrix}]]>]$$

図５と同様に、矢印の左側が動詞、右側が目的語名詞句を指している。まず、INDEXが動詞と目的語名詞句に同一の*j*指標をもつため、両者は同一のeventをあらわすと考えられる。また、目的語名詞句はDEF（DEFINITE）関数という名詞句の定性をあらわす関数がマイナスを示す。このとき、主語と動詞の目的語との間の意味関係によって示される叙述関係は、語彙規則に基づくLRSでは正しくあらわせないことから、Sailerは図６への表示をしていないと考えられる。

タイプＢのconcrete effected object readingで解釈可能な同族目的語構文は、（27）の特徴を持ち、図７のようにモデル化される。

（27）Concrete Effected Object readingの特徴

a. 同族目的語は動詞の行為の結果をあらわす＝effected object reading

b. 同族目的語が具体的に特定できる＝concrete reading

c. 同族目的語の定性は自由である

図７

$$[\mathrm{LOC}\ [\mathrm{CONT}\ \begin{bmatrix}\mathrm{HEAD\ verb}\\ \\ \mathrm{INDEX}_{\underline{i}}\end{bmatrix}]]\rightarrow[\mathrm{ST\text{-}ARG}\ <\mathrm{NP}\begin{bmatrix}\mathrm{LOC}\ [\mathrm{CONT}\ \begin{bmatrix}\mathrm{HEAD}\ [\mathrm{DEF}\ \pm\ ]\ ]\ >\ \\ \mathrm{CAUSE}\qquad\qquad\qquad \mathrm{INDEX}_{\underline{i}}\end{bmatrix}\\ \\ \end{bmatrix}$$

図７によると、動詞と目的語名詞句INDEXが同一の指標を持たず、さらにCAUSE関数により、動詞の行為の結果が目的語NPを引き起こすという解釈ができるため、（27a）の特徴が説明できる。また、（27c）の特徴については、定性の選択が自由であることから、DEF関数はどちらも選択できる±値を持っている。（27b）の特徴については、（26）と同様に、主語と目的語との意味関係で決定されると考えられるため、モデル化では省略されているようだ。

次に、タイプＣとタイプＤの同族目的語構文の構造について考える。それぞれ（28）と図８、（29）図９で構文の特徴と構造のモデル化を示す。

（28）Generic Event readingの特徴

a. 動詞とその目的語名詞句は同一のeventを示す＝event reading

b. kind readingでの言い換えが可能＝generic reading

図８

$$[\mathrm{LOC}\ [\mathrm{CONT}\ \begin{bmatrix}\mathrm{HEAD\ verb}\\ \\ \mathrm{INDEX}_{\underline{i}}\end{bmatrix}]]\rightarrow[\mathrm{ST\text{-}ARG}\ <\mathrm{NP}\ [\mathrm{LOC}\ [\mathrm{CONT}\ \begin{bmatrix}\mathrm{HEAD}\ \begin{bmatrix}\mathrm{DEF}\ \ \pm\\ \mathrm{INST}\ -\end{bmatrix}\\ \mathrm{INDEX}_{i}\end{bmatrix}]]>]$$

(29) Abstract Effected Object readingの特徴

a. 同族目的語は動詞の行為の結果をあらわす = effected object reading

b. kind readingでの言い換えが可能 = abstract reading

c. 同族目的語は定性をもつ

図９

$$[\mathrm{LOC}\ [\mathrm{CONT}\ \begin{bmatrix}\mathrm{HEAD\ verb}\\ \\ \mathrm{INDEX}_{\underline{j}}\end{bmatrix}]] \rightarrow [\mathrm{ST\text{-}ARG} < \mathrm{NP}\ \begin{bmatrix}\mathrm{LOC}\ \ [\mathrm{CONT}\ \begin{bmatrix}\mathrm{HEAD}\ \begin{bmatrix}\mathrm{DEF}\ \ +\\ \mathrm{INST}\ \ -\end{bmatrix}\\ \mathrm{INDEX}_{\underline{i}}\end{bmatrix}]\\ \mathrm{CAUSE}\end{bmatrix}>]$$

(28a) と (29a) の特徴は、図８では動詞と目的語名詞句のINDEX関数に同一の指標が付与されていること、図９では付与される指標が異なる事に加えて、CAUSE関数によって動詞の行為の結果が目的語名詞句に影響を与えているという点から説明がつく。さらに、INST (INSTANTIATION) という例示に関する関数を設け、図８. ９ともに値がマイナスになっていることから、(28b), (29b) の特徴が共に説明可能となる。また、図９では、目的語名詞句のもつDEF関数がプラスであることから、定性についての (29c) の特徴も説明できている。

４．考察と展望

２節、３節と自動詞が他動詞的にふるまう構文の意味論的アプローチを見てきたが、特に同族目的語構文に対するSailer (2010) の分析には、検討すべき問題が残っている。

第一に、用語の統一性に欠ける点である。Sailerは、同族目的語構文を４つのタイプに分類する際、新たに同族目的語の具体性について議論している。タイプによって、目的語が具体性をもつのか、総称性があるのかという意味的観察は正しいとしても、concreteとparticularという用語と、genericとabstractという用語を同一の特徴をあらわすものとして捉えているのは疑問である。「形」が異なれば、そのあらわす「意味」も異なってくるのは当然であるので、意図して異なる用語を同一の意味で扱ったのであれば、説明が必要となってくる。第二に、語彙規則を用いたLRSで構文全体の構造を捉えきれるのかという問題である。本文中で「～のようだ」と曖昧な表現を用いたが、Sailer自身は、LRSに基づく構造で説明が難しい特徴については論文内で触れていないため、説得性に欠ける部分があるのではないかと考えた。

今後の研究として、Jespersen (1927) で初出され、Sawano (2014) のコーパス調査で詳述される、(30) のような同格的同族目的語構文の意味論的アプローチについて検討したい。

(30) a. Then he smiled, a shy nervous smile. (Jespersen (1927: 235))

b. She laughed – a cheerful laugh that surprised me.

(Sawano (2014: Chapter 3, 45))

同格的同族目的語構文とは、動詞に後続する同族目的語が、ダッシュやカンマで切り離されている構文で、筆者の知る限り詳細な先行研究は存在しない。同格的同族目的語の特異性を、本稿で概観した先行研究を踏まえて、意味論的アプローチによって分析したいと考える。

注

1．Rにはinstancesやmeansなどが挿入されるが、Rがinstancesならば、動詞が項構造の個別的事例をあらわすことを説明し、Rがmeansならば、動詞が項構造に対して行う手段を説明することになる。

2．(4) のような、他動詞結果構文に後続する目的語をfake object（見せかけの目的語）と呼び、本来は目的語をとらないはずの自動詞が、動詞によって厳密下位範疇化されないfake objectを伴って、見かけ上、他動詞的にふるまう動詞が存在することを示す。

3．一方で、結果句を項構造の観点から分析する他動詞結果構文ともう一方の自動詞結果構文では、経路句と結果句の両者を項であるととらえるため、1つの文で同じ位置にあらわれる場合は、非文法的となるので、上記の結果構文はUP制約に従うこととなる。

4．Sailer（2010）では、concreteと particular、genericと abstractそれぞれの使い分けについては言及していないが、同じ性質として扱っている。

引用・参考文献

COBUILD (1995) *Collins COBUILD English Dictionary, second ed*. Tokyo: Kihara Shoten.

Cruse, A. (1986) *Lexical Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.

Goldberg, Adele (1991) "It can't go up the chimney down: paths and the English resultative." *In: Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, pp. 368–378.

Goldberg, Adele (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: The University of Chicago Press.

Goldberg, Adele E and Jackendoff, Ray (2004) "The English Resultative as a Family of Constructions," language 80, 3, 532-568.

Jespersen, Otto (1927) *A Modern English Grammar: On Historical Principles, Part 3, Syntax (second Volume)*, London: George Allen and Unwin.

Jones, Michael Allen (1988) "Cognate Objects and the Case Filter," *Journal of Linguistics* 24, 89-111.

Kuno, Susumu and Ken-ichi Takami (2004) *Functional Constraints in Grammar: On the Unergative-Unaccusative Distinction*, John Benjamins, Amsterdam.

Levin, Beth and Rappaport Hovav, M (1999) Two structures for compositionally derived events. *In: Proceedings of Semantics and Linguistic Theory* IX, pp. 199–223.

Macfarland, Talke (1995) *Cognate Objects and the Argument/Adjunct Distinction in English*, Doctoral dissertation, Northwestern University.

Massam, Diane (1990) "Cognate Objects as Thematic Objects," *Canadian Journal of Linguistics* 35, 161-190.

Matsumoto, Masumi (1996) "The Syntax and Semantics of the Cognate Object Construction," *English Linguistics* 13, 199-220.

Moltmann, Friederika (1989) "Nominal and Causal Event Predicates," *Papers from the Annual Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society* (CLS) 25, pp. 300-314.

Nakajima, Heizo (2006) "Adverbial Cognate Objects," *Linguistic Inquiry* 37.4, 674-684.

Richter, Frank and Sailer, Manfred (2004) "Basic Concepts of Lexical Resource Semantics," *ESSLLI* Course Material 1, volume 5 of Collegium Logicum, 87-143. ed. by Beckmann Arnold and Preining, Norbert, Vienna, Kurt Godel Society Wien.

Sailer, Manfred (2010) "The Family of English Cognate Object Construcions" *Proceedings of the HPSG 10 Conference Universite Paris Diderot, Paris 7, France*, Stefan Müller ed. CSLI Publications.

Sawano, Ami (2014) "On Appositive Cognate Object Constructions in English," *Linguistics and Philology* 33, 233-245, 名古屋大学英語学談話会.

Seizi, Iwata (2006) "Argument Argument resultatives and adjunct resultatives in a lexical constructional account: the case of resultatives with adjectival result phrases," *Language Sciences* 28, pp. 449-496.